

人工物の科学方法論とメディア論

—マクルーハン、ルーマン、ラトゥール—

徳安彰 (Akira Tokuyasu)

法政大学

はじめに

本発表では、社会科学的な立場（とくに社会システム論の立場）から人工物の科学方法論を考える際に、社会学的なメディア論がどのような意義をもつかを検討する。社会システムを人工物とみなすことができるなら、社会システムにおける認知やコミュニケーションといった意味構成過程にかかわるメディアもまた人工物とみなすことができる。社会学的なメディアの実体は、工学的に作られるものから社会的に形成されるものまで幅広く捉えられており、人工物の科学方法論において、社会科学と工学を橋渡しする一つの鍵になることが期待される。

コミュニケーションのメディア

一般に、メディア論において中心的な問題となるのは、人間どうしのコミュニケーションにおける相互の媒介としてのメディアであり、人間の認識（認知）における（主体／主観としての）人間と客体の媒介としてのメディアである。とくに電子的な ICT に注目が集まる現在、コンピュータと情報ネットワークがメディア論の主要なテーマとなっている。社会学的なメディア論では、たとえばルーマンのように、こうした実体的なメディアに加えて、貨幣、権力、さらには愛や真理などを象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアとみなす考え方もある。これらは、その発明・設計・製作を個人に帰属できる場合も、古く長い歴史のなかで集合的にしか帰属できない場合も、広く人工物とみなすことができる。

エージェンシーのメディア

他方、メディアを手段（＝道具）とみなす場合、メディアは、個人であれ集団であれ、広く人間のエージェンシー（行為作用）のための手段、とくにそのパフォーマンスを高めるための手段とみなすことができる。その延長線上に、ラトゥールのアクター・ネットワーク理論のように、道具そのものを、ただの媒介物（intermediary）ではなく、エージェンシーを生み出す「主体」としての媒介者（mediator）とみなすような考え方も成立してくる。現代では、とくにロボット技術の発展によって、人間から自立したかのようなエージェントが実体として実現可能になりつつある。これらも、コンピュータがコンピュータを製作し、ロボットがロボットを製作するような、完全に自律的なものとして仮想される道具＝メディアをのぞけば、広く人工物とみなすことができる。

「人間の拡張」とエージェントの単位

マクルーハンのいうように、メディアを「人間の拡張」と考える場合、行為論的な観点からみて、本来の（裸の）人間に対して、人間+メディアのどこまでの範囲をエージェント=エージェンシーを生み出す単位とみなすことができるだろうか。人間+自動車=走行体のような事象から中国語の部屋のような問題にいたるまで、さまざまな事例を考えることができよう。それぞれの事例において、本来の（裸の）人間がエージェントであって、そのエージェントがメディアを手段（=道具）として用いて、みずからのエージェンシーを生み出したという考え方と、人間メディア複合体がひとつのエージェントとしてみずからのエージェンシーを生み出したという考え方は、たんなる見方の違いにとどまらず、人間の主体性（あるいは主体/主観としての人間）という観念の再考を迫るだろう。

主体/主観の脱構築？

メディアが人間の（本来の？）エージェンシーを拡張し、変形し、場合によっては阻害し、果ては独自のエージェンシーを獲得するとすると、主体/主観としての人間という考え方も変更を迫られることになる。なぜなら、メディアは単純に主体/主観としての人間のエージェンシーのパフォーマンスを高めるだけでなく、さまざまなかたちで変質させてしまう可能性があるからである。つまり、主体/主観としての人間（あるいは本来の人間、原初的人間、裸の人間）が、みずからの意図によってみずからのエージェンシーのパフォーマンスを高めるために、あくまで手段（=道具）としてメディアを発明・設計・製作し、利用し、制御するという図式が成り立たなくなるからである。このことは、心身問題から主体/主観概念の脱構築の問題にいたるまで、さまざまな帰結をもたらすだろう。

社会システムのなかのメディア

以上の考察は、主として個としての人間とメディアの関係に焦点を当てて行ってきたが、とくにコミュニケーションや相互行為・協働行為に焦点を当てると、社会システムのなかのメディアのあり方が問題となってくる。マクルーハンが「メディアはメッセージである」という有名なフレーズのもとで指摘していることを社会システム論的にいえば、メディアは社会システムの構造や機能を変化させるような働きをする。つまり、たんにコミュニケーションや相互行為・協働行為のパフォーマンスを高めるというよりは、その構造やパフォーマンスの質を変えてしまうのである。そうなると、個人/社会-問題からエージェンシー/構造-問題にまでいたる社会学のマイクロ/マクロ-リンクの問題も、個としての行為者/主体と（人工物としての）社会システムの関係だけから考察するのでは不十分であり、そこにメディアがどのように関わってくるのかを加味することによって、より精緻な分析が可能になってくるだろう。